文

覺

（一幕二場）

人

文覺上人（四十五六）
源頼朝（三十三）
北條の息女政子姫（二十三）
文覺の弟子相照（三十位）
同じく阿那坊（十二）
寺男與次太夫（五十五）
茶屋の老婆小笹（五十）

時——治承四年の彌生の或日

處——(一)伊豆國奈古屋の文覺が庵室。——(二)同國原木村一軒茶屋。

(一) 文覺上人の庵室

（伊豆奈古屋なる文覺上人の庵室。すべて丸太造りの簡素なる建築。正面には不動明王の大幅を懸け、前に護摩壇を置く、上手は板戸によつて次の室に通じ、下手と前面には濡縁を折りめぐらして、側に筧あり、その末は細流となり、土橋その上にかゝる。

下手の奥は山櫻のさかり、上手前の方には橙數株、累々たる黄金の玉をつらぬ。

時は治承四年彌生の或日。

幕明くと、次の室にて文覺の烈しく罵じる聲聞え、つゞいて物の碎くる音す。

小僧阿那坊、鞠のごとく次の室よりまろび出づ。

文覺は太き榊の杖を手にして追うて出づ。

弟子相照、さゝへながらつゞいて出で來る。）

文　覺　阿呆め、失せえといふに、何故失せ居らぬ。

阿那坊　とうの昔に失せて居りまする。

文　覺　またその樣な妄語をぬかして居る。早く失せえ。

阿那坊　とう〳〵失せました。

文　覺　おのれ、まだ强情を張り居る。さらば二つ三つくらはしてやらう。

（文覺杖を振り上る、阿那坊庭へ飛び下りる。）

相　照　（文覺をとめて）師の坊、どうぞお許し下さりませ。阿那坊には屹度御詫び致させまする。これ、阿那坊、そなたは何故その樣に師の坊にあらがふのぢや。

阿那坊　なに、わしは些ともあらがひはせぬ。たゞ思うた事を正直に云うて居るのぢや。

文　覺　なにが正直ぢや。失せぇといふに失せぇ。

阿那坊　徒らに假の相に執して、人間本來の眞實を觀じ得ぬは、畢竟不根不覺の腥さ坊主の事ぢや。

文　覺　おのれ、それが何とした。

阿那坊　わしの肉身は、俗眼には其儘に映じて居つても、魂魄はとうの昔にけし飛んでしまうた。先刻の先刻に消え失せてしまうた。

文　覺　おのれ、もう勘辨がならぬわ。

阿那坊　此方も、もう猶豫がならぬわ。

（阿那坊下手へ逃げ去る。文覺は愈よ憤怒して庭先へ飛び下りる。相照もつゞいて飛び下り、和める。北條時政の娘政子下手より出づ。文覺はそれと見て躊躇する。）

政　子　上人にはお穿物も召されず。いづれへお出でなされます。

文　覺　な、なに、ついそこまで……そこらで阿那坊に逢はれたんだか。

政　子　ついそこで逢ひました。上人にはいつにない御機嫌ぢや、早う行けと云うてゞござりました。

文覺　（苦笑して）あいつ、まだ出鱈目をぬかし居る。

政子　あのお子は如何なされたのでござりますか。

文覺　あいつ、わしの云ふ事を聞かぬによつて折檻せうと思うたら、逃げて行きくさつた。

政子　道理で呼吸をきつて馳けて行かれました。

相照　（笑って）致し方のない惡太郎でござります。

政子　彼お子ばかりは、上人の苦手でござりますな。

文覺　外にももう一人居る。

政子　どなたでござりませう。

文覺　そなたぢや。

政子　（驚いて）何で、わたしが……

文覺　そなたに鼻を鳴してあまへられると、文覺の道心も折々ゆらめき出しさうぢや。あはゝゝゝゝ。

政子　（拗ねて）まア、好かぬ上人さまぢや。

文覺　それ、そのすねた風が苦手なのぢや。これが若い折であつたら首を斬る女がもう一人殖えたも知れぬよ。あはゝゝゝゝ。

政子　まあ、いやらしい。

文覺　（泥足のまゝ濡縁に飛び上りながら）まあ、上がらつしやれ。

相照　筧の水で足をお洗ひになりましては。

文覺　まあ、これでよい。（泥足を縁になすりつけ、護摩壇の前にすわる。）

相照　では、わたしは一寸御免を蒙ります。政子さま、御緩りなされませ。

政子　忝けなうござります。

（政子は腰をかける。相照は跣足のまゝ上手へ去る。）

文覺　あがつたら如何ぢや。

政子　（腰かけしまゝ獨語の様に）袈裟さまとやらが羨ましい。

文覺　何で袈裟が羨ましい。

政子　わたしも斬られて死にたい。

文覺　また謎を始めたの。何故死にたいのぢや。

政子　心にもない男に、想ひをかけられたゆゑ。

文覺　その様なあてつけは云はぬものぢや、袈裟に無體な戀慕をした罰で、遠藤武者所盛遠とも云はれた男が、髪そりこぼつて佛いぢりぢや。

政子　あの男も、早く出家でもすればよいに。

文覺　ひどく嫌うたものぢやな。して其男は。

政子　名さへ山木判官兼隆といふ、田舍武士でござります。

文覺　なに山木判官、あいつならわしも二三度逢うた事がある。家柄骨柄、北條の家にふさはしからぬ程とは思はれぬ、あれを田舍武士というたら、そなたの父御や弟御も、田舍武士と云はれうぞ。

政子　えゝ。田舍武士に違ひはござりませぬ。

文覺　えらい鼻息ぢやの。そこであの判官め、そなたに文でもつけたと云ふのか。

政子　いゝえ、わたしには何の沙汰もなく、直接に父の許へ云ひ込んでまゐりました、よく〳〵物のあはれを知らぬ田舍武士と見えまする。

文覺　併し、それが女夫の緣結びの本道ぢやよ。搔き口說いたりするは戀の橫道ぢや。

政子　でも、それがいつち捷徑でござりませう。

文覺　今から、その樣に拔道ばかりめがけるやうでは、親たちも安心はならぬの。

政子　でも、上人も袈裟樣をうちつけに搔き口說いて……

文覺　免せ〳〵、それは過去の夢ぢや。えゝと、それよりは差當り判官の一埒ぢやが、そなたは戀文をつけぬといふだけで、あの判官を嫌ふのか。それならばあの男にもちと氣の毒ぢやの。

政子　いゝえ、そればかりではござりませぬ。

文覺　（政子の顏をぢつと見て）はゝあ、そなたには戀人があるな。

政子　（驚いて）如何してその樣な事がお解りになりまする。

文覺　わしは天下無双の相人ぢや、この目で一睨みすれば、如何なる人間の腹の底の祕密でも隈なく解る。

政子　（わざと顏をつきつけて）それならば其戀人は誰でござりまする。

文覺　（判じかねて躊躇する）されば……、まあ其方から云うて見い。

政子　解りませぬか。

文覺　森羅萬象、有情悲情、此法師の活眼をまぬかるゝものとては無い……。が、さう何もかも云うてしまうては愛嬌が無い。その戀人はどこの誰ぢやな。

政子　心もとない相人ぢや。では申しまする。

文覺　ふむ。

政子　蛭が小島の佐殿で御座りまする。

文覺　蛭が小島の……あゝ、賴朝か。

政子　（誇顏に）清和天皇十代の後胤、前左兵衞佐源朝臣賴朝どので御座ります。

文覺　それで、そなたは、田舍武士を、毛嫌するのぢやな。成程、あれでも、十三までは都で育つたの

ぢやからな。

政子　それに、なんと云うても、こゝらの田舍武士とは、氏、素性が違ひまする。

文覺　わしは、あの男の小童の時に、一二度、垣間見た事もあるが、それから、もう、二十幾年ぢや。今度、同じ伊豆の國へ流人となつたが、いつも折惡しうかけ違うて、いまだに顏を見知らぬ。どの樣な男になつたか、逢ひたいものぢや。

政子　それは威あつて猛からぬ優美なお姿……

文覺　いや、もう、わかつた〳〵。

政子　それに……

文覺　（話せはしく）そこで、そなたの父御は其れを知つて居るのか。

政子　弟の話では、薄々氣取つて居る樣で御座ります。でも、何事も心の底に疊み込んで居る父の事ゆゑ、しかとした事は解りませぬ。

文覺　ふむ、して母御は、如何ぢやな。

政子　誰の祕密でも知らずには居られぬ、母上の事で御座ります。無論知つて居りませう。

文覺　それに母御は、そなたとは、繼しい仲であつたな。

政子　さうで御座ります。其の上母上は、生みの子の妹に、佐殿を娶合せたう思うて居ります。わたしは、

其れが、心がかりでなりませぬ。

文覺　繼母どのが、邪魔せうといふか（間）よし、それならば、この戀は、わしが肝煎つて遂げさせうぞ。

政子　あゝ、忝けなう御座ります。でも父は何と申しますやら。

文覺　いや、其の方は心配すまい。父御は人並はづれた、慾張りどのぢや。毒を以て毒を制す。慾で、持かけたら、屹度動くわ。

政子　まあ。（怨めしさうに文覺を見る。）

文覺　許されい。これはちと言過であつたかの。頼朝こそは、大將軍家の嫡々、やがては天下を掌握すべき、大福相ぢや。今の中に聟に取つたら、御身は卽ち一天下の外戚、家門の繁昌いふまでもないとかう大袈裟に、もちかけるのぢや。わしの觀相の力は、時政どのも、よう、知つてぢや。先頃の病氣を、いひ當たのも、修善寺へ入湯させて、間もなく平癒させたのも、わしぢや。其わしの口から、娘の戀人が天下取りと知つては、口伊豆の小大名の山木判官などは、日輪の前の螢の光ぢや、二言までもなく、そなたたちを女夫にするわ。

政子　でも困つた事には、あの佐殿には、その樣な野心がとんと御座りませぬ。一門親屬の菩提を弔ふが、今の身の勤めぢやというて、毎日法華經ばかりを讀誦して居られます。

文覺　（不快氣に）なに、血氣盛りの若者が經文ばかり呻つて居る？。武門に生れながらさて〳〵呆れ返つた腰拔ぢや。この文覺などはあの一大事に、一念發起して、この身體にはなりながらも、折々全身にうづまき湧き立つ妄想妄念の荒波を抑へかねて、或る時は、那智の大瀧に、此の身を打たせ、或る時は三十一日の船路の旅に一粒の穀をも絶つ。斯うまで五體を無理に苦しめても煩惱の羈は、なか〳〵に絶ちがたいを、おのれ、凡俗の身でありながら、讀經三昧に日を送るなんどとは、下根下劣の大馬鹿ものぢや。武士らしいだけでも、山木判官の方が、まだしもぢや。

政子　それでも、わたしは、佐殿がいとしい。（泣き出す。）

文覺　（又軟化して）よい〳〵、それ程までに思ひ込んで居るなら、強ひて思ひとまれとは云はぬ。では、兎も角もその腰拔どのに、わしが逢うて見よう。こゝへ、寄越して見ては如何ぢや。

政子　逢うても、優しうして下さらねば……

文覺　承知ぢや〳〵。逢うた上で、如何やら物になりさうなら、嗾かけて見てやらう。

政子　それでは直ぐに、これへと申しませう。

文覺　と云うても、さう急には來られまい。

政子　なに、直ぐでも、よろしう御座ります。あの人は觀音堂で、わたしを待つて居ります。

文覺　觀音堂で……これ〳〵、あそこは、清淨な佛の庭ぢや。逢引きの場所にしては勿體ない。

政子　觀音さまは、上人の樣に嫉妬深うは御座りませぬ。（政子はいそ〳〵と下手に去る）。

文覺　これ、今日でなうてもよいわ。

（弟子相照、次の室より出て來る。）

相照　政子さまには、もうお戻りで御座りましたか、白湯でも差上げようと存じましたに。

文覺　あんな者には、水でもぶつかけてやれ。

相照　又、なんぞお氣にさはりましたか。

文覺　あつちへ失せえ。

相照　はつ。

文覺　失せえ。

相照　はつ……あの下男の與次太夫が、お目にかゝりたいと、申して居りまするが。

文覺　與次太夫……地ならしの事であらう。こつちへ寄越せ。

相照　はつ。

（相照は次の室へ去る。戴鷲の聲遠く聞ゆ。やがて、上手より下男與次太夫、片手に鍬、片手に髑髏を持つて入り來る。）

與次太夫　上人さま。

文覺　何ぢや。

與次太夫　（髑髏をさし出して）こんなものが飛び出しました。

文覺　（それを手に取つて）何處からな。

與次太夫　御入定の庵室を作るべいと、あの洞穴の地ならしをして居ましたら、土の中から、ころりと轉がり出しましたゞ。どんな奴の沙利骨か知んねぇが、斯う白く、晒れてるところを見ると、二三十年は確かに立つて居ますだあ。

文覺　なる程なあ。久しく土中に埋れて居たものと見えて、すつかり晒れ切つて居る。何ぢや、こゝに傷があるぞ。

與次太夫　なァに、それは、今わしが鍬で、がちりとやつたので御座りまさあ。併し、斯う古くなつたら、痛いも痒いも、わかりはしますめえ。

文覺　兎に角、斯う泥だらけではしようがない寛の水で洗つて呉れ。

與次太夫　はい〳〵。では、久しぶりで、顔を洗つてやりますべい。

（寛の水にて髑髏を洗ひ、衣服の袖にて拭きながら文覺の前に來る。）

與次太夫　生れ返つた樣に綺麗になりましたゞ。この樣子ぢや、昔は大した別嬪だつたかも、知れましねえな。上人さまが、ちよん斬つたと云ふ、袈裟とか法衣とかいふ人の首ぢやァねえかな。

文　覺　馬鹿を云へ、袈裟の首は鳥羽の戀塚に埋めてある。それに、これは、男にしても餘程大きな頭ぢや。

與次太夫　それぢやあ、蛭が小島に御座らつしやる頼朝樣の父樣の首かも知んねえ。あの人は圖なし一番のどたまだと云ふ評判だから。

文　覺　頼朝の頭は、そんなに大きいかな。

與次太夫　何でも大抵の人の、烏帽子ぢやあ、あの人の頭にやあ、のつからねえつて事で御ぜえまさあ。

文　覺　それ程、大きいのかなあ。（ぢつと髑髏を見入る。）

與次太夫　誰の沙利ッ骨でも構はねえ。二十年も地べたに、潛ずり込んで居たんでは、魂魄は宙宇に迷つて居るに違えねえ。上人さま、一つお經を上げて、成佛さしてやつておくんなせえ。

文　覺　よいとも〳〵。

（阿那坊、下手よりかけ出で來る。）

阿那坊　師の坊、世になし源氏がやつてまるりました。

文　覺　誰れが來た。

阿那坊　蛭が小島の流人どので御座ります。

文　覺　なぜ。名を云はぬ、どの樣な人に對しても、其の樣な無禮な事をいふものではない。

阿那坊　師の坊の眞似をして見たのぢや。

文覺　おのれ。（思はず手にせる髑髏を投げつけようとする。）

與次太夫　（驚いて）上人さま、それを礫がはりにしちやあ、可哀さうだ。

文覺　左様であつたの。

阿那坊　前兵衛佐、源朝臣頼朝どのは、なんとなされます。

文覺　これへ通せ。

阿那坊　畏つて候。

（阿那坊は、わざと侍めかして下手に去る。）

與次太夫　上人さま、それは如何しますべえな。

（髑髏を指す。）

文覺　置いて行け。

與次太夫　では、上人さまがお經を上げてくれさしつたら、あとで何か好きなものでも御馳走して、改めて葬つてやりますべえ。

文覺　それは、奇特な事ぢや。わしも寄進につかう。相照に云うて欲しい程貰うて行け。

與次太夫　有難う御座ります、それでは、もう少し經つたら、其の佛を貰ひに來ますべえ。

（與次太夫、いそ〳〵として上手へ去る。
文覺は髑髏を、ぢつと見て、思はず微笑する。やがてそれを手にして、次の室に入る。
左兵衞佐頼朝、阿那坊に案内されて下手より入り來る。）

阿那坊　さゝ、お上りなされませ。

頼　朝　して、上人は。

阿那坊　只今まで、これに居りましたが……

（文覺、次の室より出で來る、軈て頼朝を見るや、電光に打たれし如く、ハタ〳〵と護摩壇の前に平伏する。）

阿那坊　やあ、また、狂氣がはじまつたな。

文　覺　おのれ、何を叫す、失せ居らぬか。

阿那坊　失せます〳〵。

（下手へ走り去る。）

文　覺　この文覺、日本國中を修業して、在々所々に源平兩家の公達とも見參致したが、殿の如き威應の相あるおん方を、たんだ一人も見奉つた事は御座らん。誠に殿こそは、一天四海を奉行すべき大將の相好完備して、大果報の末頼母しき御方ぢや。まづ〳〵、あれへ。

（文覺は頼朝の兩手を取つて上座に直す、頼朝は茫然として席に着く。）

文覺　（涙を流し）まことに、故下野守殿を、其儘の御姿ぢや。頭の殿、若しこの世に在して、此體を御覽じられたら、如何ばかり御よろこびなさる事であらう。由緣のふかゝらぬ此法師でさへ、鬼の目にこの涙ぢや。（泣く。）

頼朝　草刈る童にさへ、世になし源氏とうたはれて、世にも、人にも棄てられし頼朝の今の身には、その情ある語こそ、肝に銘じて、忝けない。行末ともに、親しう交つてくだされい。

文覺　（いよ〳〵涙に咽び）勿體ないお語ぢや。源氏こそは、清和天皇の後胤、六孫王の末葉にして、一天の守護、四海の將軍たるべき家柄ぢや。其嫡々の佐殿が、如何に武運の末なればとて、文覺如き痩法師に、今のお語は、何事ぢや。況して、只今も申した如く、殿には天下を管領すべき瑞相が御座る。唐土にては漢の高祖……

頼朝　（あたりを憚りて）思ひもよらぬ其の語。一家一門悉く歿落してわれたゞ一人、かゝるいぶせき片田舍に、わづかに露命を繋ぐ薄運の身の上ぢや。萬一、平家の耳にでも入らば、此の身の一大事と、ならうも知れぬ。以後は決して其樣な……

文覺　（哄笑して笑ふ）文覺の觀相はたんだ一度の見損じもござらぬ。此法師の兩眼こそは、決して凡夫の眼でない。左は大聖不動明王、右は孔雀明王の御目ぢや。人の果報を知り日本國を照し見る事、さながら掌を指すが如くぢや。今は早、何の躊躇、疾く〳〵謀叛を起し、平家を打滅ほして、父の

恥を雪ぎ、天下の主とおなりなされ。

（文覺は次第に頼朝の前に詰めよる。）

頼朝　（不安らしく）思ひもかけぬ事ぢや。此の身は勅勘を蒙りたれば日月の光にあたるさへ憚りある。況して池殿の尼御前には、一命を助けられたる大恩さへあるに、平家へ對して弓矢を向けんなんどとは、夢にだに思うた事はない。髮こそ絶たね、心には墨染の法衣を纏ひ、日毎に法華經二部を轉讀して、父母親屬、殊には池の尼御前の冥福を祈る外には餘念もない。謀叛などとは耳にするさへ恐ろしい。

文覺　（俄かに狂氣の如く）弱蟲め、恥知らずめ。

頼朝　えつ。

文覺　卑怯もの、腰拔武士、日本一の大馬鹿者。

（云ひ棄てゝ次の室に駈け入る。頼朝は悄然として立上り去うとする。）

文覺　（次の室にて）待て、左兵衛佐。

頼朝　何と。

（文覺は左手に先刻の髑髏をもつて出で來り、護摩壇より獨鈷を取り、それにて髑髏を碎かんとする。）

頼朝　（驚いて之を止めながら）如何なる人の髑髏か知らねど、出家沙門の身にてそのあらけなき振舞は、

あまりに兇惡無慚ぢや。まづお靜かになされい。

文覺　若し、此髑髏に靈あらば、おのれが如き不孝者の、卑怯な語を聞くさへ口惜しからう。二十餘年の修羅の妄執をたゞ一擊に微塵に碎き、左馬頭義朝が未來の苦患を救うてやるのぢや。

頼朝　（驚きて）な、なに、これがわが父の……

文覺　左樣ぢや。平治の昔、三條の河原にて獄門にかけられたを、此文覺が盜み取つて久しく土中に隱し置いたのぢや。

頼朝　（髑髏の前に額づいて）斯くと知らば一日も早く此庵室に推參し、父上の御骸に見參しまゐるべきを、間近く住みながら一片の香華をさへ、捧げ申さゞりし此身の罪、御詫の致しかたもござりませぬ。

文覺　（涙ながら）國こそ多けれ、所こそ廣きに、御身もわれも同じ國に流され、二十餘年の長の間、隱し置いたる此首を、今見參に入るゝこそ、よく〳〵深い由緣でござらう。（頼朝の嗚咽する態を見て、急に怒り立つ）併しそれもこれも無益になつた。己のやうな謀叛一つ得起せぬ卑怯者を子に持たれたは、下野守どのが七生までの憾みであらう。最期の無念を其儘に宿したる髑髏に、おのれが如き腰拔け面を見せたは、此文覺が一代の不覺であつた。下野守殿。免して下され。

（聲を放つて泣き、やがて髑髏をかき寄せ、獨鈷をふるつて又打碎かうとする、頼朝は文覺の手にすがりつ

きゝ

頼朝　上人、お待ち下されい。只今の御教訓心に銘じ、左兵衛佐頼朝初めて迷夢の醒めたる思ひ、平家追討の旗上げ、屹度思ひ立ちまする。

文覺　（嬉しげに）うむ、うむ、屹度謀叛を起すな。

頼朝　父義朝公、尊靈も照覽あれ。佛神の怨敵、王法の朝敵たる清盛法師、ならびに平家の一門一類を、必ず追討致しまする。

文覺　うむ。それでこそ源氏の嫡々、左馬頭どのが祕藏の子息ぢや。

頼朝　それにしても、此頼朝は勅勘の身の上、無名の師は勝利の程が覺束ない。せめては竹の園生の御方の御令旨にても申受けて。

文覺　令旨までもない。これより直ちに新都福原の櫻の御所へ馳せまゐり、院宣を申し受けよう。

頼朝　併し上人とて、世を憚るべき勅勘の御身ゆゑ。

文覺　院の御所には前兵衛督光能とて、此法師が外戚のゆかりの者がある。此者について嘆き申せば、仙洞の宣旨を申受けんは一定ぢや。

頼朝　それにしても流人の身にて、此伊豆を脱け出す手段はござりますか。

文覺　それとても易い事ぢや。先頃より七箇日入定の旨を、國中に披露して置いたこそ幸ひぢや。庵室

の下へ穴を掘らせ、そこより拔出して都へ馳せ上り、七日目の夕暮までには必ず立歸るわ。

頼朝　驚き入つたる上人の大妙策、唐土の孔明とても及びますまい。

文覺　その樣な空世辭は嬉しうもない。それよりも事成就の曉に、十分の禮は心得て居らうな。

頼朝　申すまでもござらん。天下だに手に入らば、五國十國の所領はお望みのまゝに寄進致す。

文覺　いや、此痩法師に所領の望はない。欲しいは高雄神護寺造立の寄進ぢや。

頼朝　いづれの國にても御所望通りに致し申さう。

文覺　（笑って）さて〳〵大腹中の將軍ぢや。但し何事でも、おのが物とならぬ中は、誰しも腹の廣いものぢやが、一旦わが物となつたら最後、出し惜みのせらるゝが人情ぢや。今の内に寄進狀を書いて貰はう。（傍らにありし文臺をつきつけ）よいか、丹波の國に五ヶ所、播磨の國にも同じく五ヶ所、土佐の國に十三ヶ所、さあ、判形を書いて下され。（頼朝の書きし寄進狀を默讀して）これでよい、これでよい。此上は庵室の造營が大急ぢや。こりや、相照々々。

相照　（次の室にて）はあ。（相照出て來る。）

文覺　與次太夫を呼べ。

相照　與次太夫は先程から庫裏にて御待ち申して居ります。あの髑髏の事につきまして……

文覺　（はっとして）いや、わしの云ふのは與次太夫ではない。與次兵衛ぢや。

相照　（不審さうに）與次兵衞……與次兵衞と申しますと……。

文覺　それ、北條の匠の與次兵衞ぢや。はゝゝゝゝ。

（相照も賴朝も怪訝さうに文覺を見る。藪鶯の聲、櫻花しづかに散る――暗轉。）

（二）　原木村一軒茶屋

下手よりに草の屋、酒、餅などをひさぐ。家の前には自然木の床几二ツあり、一ツには前場の寺男與次太夫と阿那坊と腰をかけ、與次太夫は酒を呑み阿那坊は餅を食ひ居る。茶やの主なる老婆小笹は家の中にて麻をつむぎ居る。

小笹　與次太夫どのは今日は大層な上景氣ぢやの。

與次太夫　うむ、今日は思ひがけない金が舞ひ込んでな。

小笹　それは結構な事ぢや。七半でも打つて勝たしやつたか。

與次太夫　何の、今度上人さまが、あの觀音堂の洞穴の中で、七日の入定をさつしやるについて、けさ地ならしをおつ初めただ。すると如何だ。鍬の先へがちりと當つたものがあるだ。

小笹　それが金だね。

與次太夫　おれも左樣かと思つて拾ひとつて見ると人間のしやりつ骨よ。

小　笹　やれ〳〵、南無阿彌陀佛、々々々々々々。

與次太夫　併しの、それも何かの縁に違ひねえ。これあ。おれに弔つて貰えていといふ、佛の頼みだんべいと思つたでの、上人さまに御回向をお願ひ申しただ。すると平常は狂人じみた上人さまだけんど、根がある云ふ涙脆え方のこんだから、それは奇特なこんだ。何か佛の好きさうなものを馳走してやれつて、金をうんと下さつたゞ。

小　笹　それこそ御奇特の事だつたな。それにしても、おめえ。そのお金でてめえの腹ばかり肥したのでは、回向にも何にもなんねえでねえか。

與次太夫　さあ、そこだよ。おめえ、その佛が何が好きだか解るかな。

小　笹　生れ素性せえ知れねえものに、好き嫌ひの事が分りやうがあるものけえ。

與次太夫　それでおれも當惑したゞ。若し下戸の佛に酒を手向けたのでは冥路の障りになるだんべいし、と云つて、上戸に餅ではこれも迷ひの種だ。そこでいろ〳〵と考へた揚句が、上戸ならおれが名代になり、下戸だつたら阿那坊どんに代り役をして貰つてどつちみち佛に苦勞をかけねえ事にしたよ。

小　笹　可哀さうに、佛さまこそいゝ面の皮だ。

阿那坊　しやりつ骨に面の皮があつて堪るものか。

小　笹　あれまあ小僧さま、そんな憎まれ口を叩かつしやるもんぢやァねえよ。

阿那坊　餅がなくなつて口がひまになつて來たから、そろ〳〵憎まれ口でも利かなければならない。

與次太夫　無くなつたら、もつと貰つて喰べたがいゝぢやねえか。

小　笹　腹も身の中だ。ちつとは加減をしなさるがいゝ。先刻から大人の五人まへも喰べてしめえなすつたゞ。

阿那坊　愚僧は身體こそ、少々小ぶりだが、智慧にかけては、大抵の大人の十人まへはあるから、喰ひ物も從がつて餘計に入るわけだ。なにしろ喰ふものも、喰ふものも、みんな智慧袋へ入つてしまふから、ちつとも身になりはしない。

小　笹　全く口から先へ生れて來なしつた樣な小僧さまだ。

阿那坊　だから、生れ落ちると直ぐに天上天下、唯我喰尊とのたまはせられた。

與次太夫　煩くてならねえ。もう少し口ふさげをやつてくんなせえ。

小　笹　でも、餅はみんなになつてしまつたゞ。

阿那坊　嘘をつけ、まだあの棚の中に一盆殘つて居らァ。

小　笹　あつ。見附けたかね。

阿那坊　今度は目から先へ生れたやうな小僧さんだと云ひたからう。さァ、物惜みをせずに、出せ〳〵。

小　笹　あればつかしは御領主さまのお云ひつけでも出せましねえ。

阿那坊　何故によ。

小　笹　あれは蛭ヶ小島の頼朝さまへ上げるのでがんす。

與次太夫　なに、頼朝さまへだつて。

小　笹　あの方が蛭ヶ小島へ初めて流されて來なすつた時分から、恰度二十年といふもの、おらあ毎日缺かさずに、此餅を獻上する事にして居るだよ。

與次太夫　おらあちつとも知らなかつたが、何だつてそんな事をして居るのだ。

小　笹　だつて、おめえさま。あの方は大將軍のお家筋だつていふぢやァねえか。いくら世の末だつていひながら、それほどのお家の若殿樣が、あんな蛭ばかりのたくつて居る島の中で、粟の入つた糧飯を喰つてござらつしやつたぢやァねえか。此節はやつと武藏の方の御家來から、飯米の仕送りも來るやうになつたさうだが、あの頃の苦患艱難は與次太夫どの、おめえも知つてるさつしやらう。おらあ、それが氣の毒でなんねえから、毎日一盆づつお初穗を上げる事にして居るだよ。

與次太夫　一日一盆づつにしても、二十年と云つちやあ大したものだ。頼朝さまも、さぞ有難く思つて居なさるだんべえ。

小　笹　（笑って）世が世なら、こんな田舍婆あの、こねた餅なんざあ、間違つたつて召上つちやあ下さる

めえ。それを思ふと此方の方が餘程有難てえだよ。

阿那坊　あゝ、おれも將軍の家に生れて、毎日餅が喰ひたかつたな。

與次太夫　將軍さまの公達が、毎日上人さまにどやされて居れあ世話はねえだあ。はゝゝゝゝ。

小　笹　全くだ。ほゝゝゝゝ。

阿那坊　（窓と上手の方を見て）やあ、餅喰ひの將軍さまがやつて來らあ。

與次太夫　ほんに頼朝さまだ。睦まじさうに話をして來なさるのは、北條のお姫さまぢやあねえかな。

阿那坊　さうだ政子姫だ。先刻は師の坊のとこで油を賣つて居たつけが今度は世になし源氏どのとべたべたして居らあ。あんなに男の好きな娘ッ子もない者だ。

小　笹　これ、子供の癖に、そんな、ませた事をいふもんぢやあねえ。あの方々はこゝで休んで行きなさるだ。與次太夫どの、おめえも奥へ行つて呑んでおくんなされ。

與次太夫　よし〳〵。『人の戀路は邪魔せまい〳〵。』

阿那坊　『邪魔をしたら、犬まろに喰はせうぞ。犬まろに喰はせうぞ。』（謠ひながら踊る。）

小　笹　そなたも、なか〳〵隅へは置けましねえな。いつそ、何處ぞへ行つて遊んで來なされ。

阿那坊　あゝ、狩野川へ行つて、鮑でも漁つて來よう。

與次太夫　滅相な。出家が殺生をなさるといふ事があるものか。

阿那坊　師の坊などは、人の首さへ斬り居つた。『犬まろに喰はせうぞ喰はせうぞ。』

（阿那坊は踊りながら下手へ去る。）

（與次太夫は酒杯をもつて家の中へ入る。小笹は床几の上をかたづける。前場の頼朝、白の絹にて包める髑髏を手にし、上手より出づる。政子もつゞいて出づ。）

頼朝　嫗、そこを借りるぞ。

小笹　ようおいでなされました。お姫さまも御一緒にお詣りでござりましたか。

政子　つい、そこでお目にかゝつたのぢや。

小笹　さあ、何卒おかけなされて下さつしやりませ、誠にむさくるしうはござりますが。……さゝ〳〵殿様、お初穂が取つてござりますだ。さあ、一つ召上つて下さつしやりませ。

（戸棚より餅を取り出し、白湯を二人に出す。）

頼朝　いつもながらのその親切、頼朝忝けなく思うぞ。やがて天下を……いや、世に出る事もあらば、此恩は屹度返すぞ。

小笹　（涙ぐんで）其お話でもう〳〵澤山でござりますだ。（思ひついたやうに）奥にお客様がござります。一寸御免なされて下さつしやりませ。お姫様、たんとお話しなされやし。

（小笹は與次太夫の側へ酒をもち行く。二人は床几にかける。）

政子　して、上人はどの様な事を仰有りました。

頼朝　わしの顔を見ると、突然わしの相を褒め立てゝ、（俄に聲を潜め）天下を掌握する威相があると云ふのぢや。

政子　まあ。

頼朝　而して、わしに（政子の耳に口をあてゝ囁く）と、勸めるのぢや。

政子　（微笑して）で、あなたは何と返事をなされました。

頼朝　何分にも、あの法師の腹がのみ込めぬ。平家の手先となつて此頼朝を陷れん謀計かも知れぬと思うたによつて……

政子　（不安になりて）何となされました。

頼朝　わしには其樣な野心は毛頭ない。わしには父母親族、わけても池の尼御前の菩提を弔ふ外に餘念はない、と、きつぱりと斷つた。

政子　それで、ようあの上人が納得致しましたな。

頼朝　するとあの法師、俄かに狂ひ出して、雷の落ちかゝる樣な惡口雜言ぢや。而してこの樣なものを持出して理不盡に打碎かうとするのぢや。（絹の包をとく）。

政子　それは何でございます。

頼朝　（髑髏を示して）父左馬頭の髑髏ぢやさうな。

政子　（直覺的に）誠でござりませうか。

頼朝　さあ、それは解らぬが相手は妄語を戒むる出家の事ぢや。それに、外の事とは違ふ、まさかに此様なもので他を欺しもせまい。

政子　それも左樣でござりますな。

頼朝　それに上人の話では、父上の頭は抜群に大きかつたといふ。而してこの髑髏も人並ならず大きいと云ふ事ぢや。

政子　其の樣な證據があるなら、頭殿の頭に違ひはござりますまい。

頼朝　（あたりに心を兼ねて）上人は此の髑髏の前で散々にわしを叱られた。卑怯者、腰抜武士、此樣な不孝者の面を見せるは此の頭に氣の毒ぢやと罵られた。

政子　それで、それで、あなたは謀……あの決心をなされましたか。

頼朝　父上が最後の無念を思ふと、惣身の血潮が湧き立つばかりに思はれた。それ故（聲を潜めて）とう一大事を思ひ立つた。

政子　あゝ嬉しうござります、（政子頼朝にすがりつく）上人は父へ勸めてくれるでござりませうか。

頼朝　おゝ、直ぐに行くと云うて居られた。程なくよい返事があるであらう。

政子　殿。

頼朝　政子どの。

（兩人は感極まつて涙に咽ぶ、此の時與次太夫蹌踉として二人の側に來る。）

與次太夫　これは殿様、お姫様、へ、へ、お樂しみでござりますな。

（小笹は心配げにあとより跟き來り、與次太夫の袖をひき。）

小笹　これ、與次太夫どの、若い方たちのお邪魔をするものではねえよ。

與次太夫　いや邪魔するわけぢやねえが一寸殿様に伺ひてえ事があるだ。

小笹　今でねえたつて好いぢやあねえか。

與次太夫　うんにや、今の今でなけれあなんねえ事だ。殿様、このしやりつ骨はどつから持つて來なすつただね。

小笹　これ、殿様に失禮な……

與次太夫　いや、失禮でねえ、殿様、一體これはどこから手に入れさつしやつた。

頼朝　奈古屋の文覺上人から貰うて參つた。

與次太夫　へえ上人さまから……殿様、一寸見せておくんなせえ。（取らうとする。）

頼朝　（取返して）これだけは許してくれ。

與次太夫　そんなに隱すにや當るめえ。燒いて喰ふべぇとは云やあしねえ。

小　笹　（氣をもんで）これ與次太夫どの……これは殿樣の……

與次太夫　（手に取って）やあ、こいつに違ひねえ。

賴　朝　その髑髏が何とした。

與次太夫　これはおれがだ。

賴　朝　そちは酒に醉うて居るな。それは父の髑髏ぢや。

與次太夫　（腹をかゝへて笑ふ）冗談ぶつちやあいけましねえ。こいつあ、今朝わしが觀音堂の洞穴から、掘出したしやりつ骨だ。これ、そこに證據があるだ。

賴　朝　どれ何處に。

與次太夫　これあわしが今朝鍬でつけた疵だ。

賴　朝　併し上人は二十年前に、三條の河原から、盜み出した父の髑髏ぢやと云うて居られたが……

與次太夫　（一層笑って）とう〳〵おめえ樣も上人さまの大法螺に吹きとばされやしたの……

賴　朝　なに、上人が僞りを……

與次太夫　上人さまあ日本中に並ぶ人のねえ程偉え坊さまださうだが、折々出たらめを云つて人をかつぐのと、何でもねえ事で人をなぐるのが悪い癖でごぜえやすよ。

賴朝　それならば、これは何者の髑髏ぢや。

與次太夫　そんな事が誰に解りやすもんか。二三十年この方、あんな場所で人の首なんか葬つた事あねえ

賴朝　だから、どつかゝら犬でも咬へて來た宿無しか、乞食の首でもあんべい。

政子　さうか、名も無いものゝ首であつたか。生の父上の御しるしと思うて、不幸の罪を詫びた此賴朝は、日本一の大馬鹿ものぢや。あの賣僧の僞りさへ看破する事のならぬ、愚かな此身に、どうして一大事が企てられよう。政子どの、面目ない。

賴朝　無理にお勸め申して、逢うて戴いたわたしが猶更面目なうござります。あゝ、あの上人が、わたしまで欺さうとは……

賴朝　えゝ、思へば腹立しい……

（髑髏を大地に投げつける。與次太夫之を拾ひつゝ）

與次太夫　此しやりゝ骨には何の罪もねえ、粗末にしては貰ひますめえ。さア〳〵、寺へ連れて歸つて、ねんごろに葬つてやりませう。

（與次太夫は髑髏を手にして蹌踉と上手へ去る。賴朝は引止むる勇氣もなく、悄然として其後姿を見送る。政子もおのが撒いたる種子の意外なる實を結ぶるに驚き、茫然として佇み居る。）

小笹　あれ、與次太夫どの、おめえ、まだ勘定は濟んでねえだよ。これ與次太夫どの、與次太夫どの。

（小袖はあわてゝ與次太夫のあとを追ふ。家の後ろに鳩の啼く音。）

頼朝　左様ぢや。初めから案じた通り、あの賣僧めは平家の間者ぢや。見え透いた手段にかゝつて、此身の破滅を招いてしまうた。（身悶へして怒る。）

政子　あれ程親切にして居てくれた上人が、俄にわたしをだまさうとは思はれませぬが。

頼朝　二人の仲を聞いて、俄かに嫉ましくなつたのぢや。

政子　ほんに左様云へば……いや、いや、それほどの心の狭い上人ではない。

頼朝　袈裟をさへ殺した男ぢや、何をするか解るものか、（上手を見る。）やあ、賣僧めがこつちへ來る。

政子　おゝ、ほんに上人が……

頼朝　おのれ、今の復讐を……

（頼朝は上手に走り入らんとす。文覺莞爾として上手より姿を現す。）

頼朝　文覺御坊……

文覺　はゝゝゝゝ、いや與次太夫から理由は聞いた。あの髑髏は違うて居たさうぢやな。

頼朝　默れ、文覺、おのれは此頼朝を……（刀に手をかける。）

文覺　（哄笑して）はゝゝゝゝ、さう怒つては折角の人相が悪うなる。佐殿、御身はあの髑髏を何と思うてござる。あの様なものは畢竟人間が使ひ古した智慧と力の糟の塊ぢや。一旦髑髏となる上は貴人

も下民も差別はない。たゞ人間の貴い魂が、あのやうなむさい古骨などに宿つて居ぬだけが定ぢや。

頼朝　そ、それにしても……

文覺　この文覺が今日御身に引合せたは、下野守どのの古骨ではなうて、尊い父御の魂ぢや。わしは折から土中より現れたあの一片の枯骨を借て來て、御身の心の底に眠つて居た源氏再興の魂を呼び醒したのぢや。あの髑髏が、よしや乞食乞丐の骸であらうとも、其爲にこの天下が、御身の兩の手に入つたら、御身に取つては、父御の眞實の首よりも、一入尊い寶ではないか。

頼朝　えッ。

文覺　（冷かに）それとも此法師に欺された口惜しさに、折角思ひ立つた一大事を棄てゝしまふか。

頼朝　うむ。

文覺　佐殿、髑髏は贋物でも、人相だけは本物ぢや。『天の與ふるを取らざれば反つて其咎めを受く』とは、漢書の語ぢや。政子どの、戀人のあの人相を、持ち腐れにしてしまふは惜しうはないか。

政子　（哀訴するやうに）佐殿。

頼朝　上人、お免し下され。

政子　上人樣、この通りでござります。（政子は文覺に手を合す。）

文覺　（快よげに）よい、よい、雨降つて大地固まるぢや。これで佐殿の決心も固うなつたであらう。

頼朝　面目次第もござりませぬ。

政子　善は急げぢや、上人、少しも早う父上にも……

文覺　左樣ぢや。丁度よい折ぢや。これから直ぐに一緒に行かう。三人で推かけて、あの慾張爺を煙に捲いてやらう。

政子　また、その樣な……

文覺　その樣に苦い顏はせぬものぢや。（頼朝の肩をたゝいて）そなたの父御に輪をかけた慾張どのがこゝに居るわ。無慾のこの法師に馳けめぐらせて、天下を我物にせうといふ日本一の大慾張ぢや。（頼朝と政子は相顧みて苦笑する）

文覺　慾張といへば、佐殿、髑髏が贋物になつたと云うて寄進狀は反古にせまいの。

頼朝　頼朝は嘘をつくが嫌ひでござります。

文覺　（歩きながら）これ、左樣皮肉にはいふまい。（花道の附際に立ちて）佐殿々々。

頼朝　（政子と共に文覺の側に來り）何事でござります。

文覺　今度は本物の下野守殿の髑髏を探し出して、新たに一寺を建立せう。その時には何ヶ國程の寄進をして下さるな。

頼朝　さア、それは……

政子　慥かな事が極つてからになされませ。又欺されてはなりませぬ。

文覺　今から雌雄が時をつくらせては、源氏の末も思ひやられるぞ。あはゝゝゝ。（政子は顔を背く。頼朝はひそかに微笑す。文覺先に三人打つれて揚幕に入る。）

――幕――

大正十四年二月一日印刷
大正十四年二月五日發行
大正十五年八月一日再版印刷
大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
第三卷

著者　松居松翁　高安月郊　山崎紫紅　伊原青々園　岡鬼太郎

發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　守岡功

印刷所　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番二一八八番
振替東京五二二九八番

（非賣品）